

ぼくはかわいそうじゃない

御多福豆

「ぼくは、目が見えない。」

という、一番よくいわれるのが、

「真っ暗で、お母さんの顔も、お父さんの顔も、見たことないの、かわいそうに!」

じつはかわいそうといわれるのが、一番嫌いだ。ぼくにとっては、当たり前のことだから、勝手に、かわいそうと思われるのが嫌だ。それに真っ暗の世界ではなく、光は感じる。明るさが、なんとなく分かる。

夢もある。何の仕事かわからないけれども、大きくなったら、盲導犬とさっそうと、仕事に行く決めてる。楽観的で前向き、体を動かしたくて、うずうずしている。

得意なのは、スイカ割り、もちろん目隠しは、いらぬ。すぐに割ることができる。

この頃は、モノがあると、なんとなく圧力を感じる。お金を落とした音だけで、いくら硬貨かわかる。足音だけで、だれか当てる。触覚で何でもわかる。父ちゃん、母ちゃんの顔も、触れば、ほくろの位置までわかる。指の先に目が付いているみたいに点字を、指で読む。弟のヒロくんは、エスパーというが、特殊能力ではなく、当たり前なことだ。

夏休みは、時計無しで過ごそうと決めた。

目覚まし時計は、セミの鳴き声。

いつもは、遠い盲学校へ行くので、母ちゃんにたたき起こされている。クマゼミからアブラゼミ、夏の終わりのツクツクボウシ、セミの鳴き声がバトンタッチされていく。夕方はヒグラシが物悲しく鳴きだす。まず、キリギリスで始まり、コオロギ、鈴虫、豊かな音の世界がある。虫たちの応援に聞こえる。

目が見えないからと、あきらめるのは嫌だ。何でも、挑戦する、負けず嫌い。

スイミングも、ヒロくんといっしょに習っている。まっすぐ泳げないので、鈴の音で、問題解決。

ある日、江戸の道マラソン大会に、ヒロくんが出ると知り、ぼくも出たいといったら、次の日、母ちゃんが渡してくれたのは、柔らかい布を輪にした、物だった。

「これは、『きずな』といって、マラソンの伴走者が目となり、この布の輪、きずなでつながり、一緒に走るのよ。買うのはもったいないから、手ぬぐいでつくったの。」

「だれが伴走者してくれるの？」

「父ちゃんに、頼んだわ。」

「ヤッター!! これで出られる。」

こうして、地元のマラソン大会に出ることになった。ヒロくんには勝ちたいので、父ちゃんと近くの公園で練習した。

いよいよマラソン大会だ。

よーいドン、スッスッ、ハッハッ、呼吸も一つになり、息もぴったり。父ちゃん一つになった。

前を走っていたヒロくんは、飛ばし過ぎたのか、急にスピードダウンした。そのすきに、追い抜かしてゴール。この勝負は、お兄ちゃんの勝ち！ また来年も走ろうと約束した。